

『写真とは何か』。

結局わからなかった。

ただ、写真というのは必ず、

その写真を撮っている

ぼくがこちら側に居るということ。

ぼくの存在が想像できるのだ。

ぼくがやられた左脳は理論的なこと、

残った右脳は感覚的なひらめき、

と聞いたことがある。

カメラマンにとっては

少しの救いではあった。

(小川節男)

小川節男展

死を間近に覗き込みながら、今を生きる生を
写した小川節男、死後初の東京での個展

明日を生きる我が身

2020年10月5日(月) - 10月17日(土)

開廊時間 | 12:00~19:00 [土曜日のみ 12:00~17:00]

休廊日 | 10月11日(日)

会場 | 十一月画廊 (東京都中央区銀座7-11-11 長谷川ビル3F)

観覧料 | 無料

主催 | 十一月画廊

協力 | (株)イニユニック、masayoshisuzukigallery

Gallery Ju-ichi gatsu

十一月画廊

小川節男「明日なき我が身」

小川さんが最後の写真集に書き記したあとがきに、『写真とは何か』。結局、わからなかった。ただ、写真というのは必ず、その写真を撮っているぼくがこちら側に居ること。ぼくの存在が想像できるのだ」とある。

これが実は、写真の本質ではないか。今回の写真集には、全て小川さんの眼差しがある。これらの写真のシャッターを押したのは、紛れもなく小川さんだった。小川さんは何を見てきたのか。

小川さんの写真は、街のスナップで、風景、物、人物がランダムに撮られている。対象を比較的しっかりと捉えているので、何が小川さんの目に留まったのかが、よく分かる。華やかで洗練された街ではない。むしろ、現代都市の薄汚れた繁華街、あるいは、そこに連なる生活空間で、底辺に生きる人々、社会から切り捨てられた人々、そうした情景、事物を撮っている。

この写真集に写された人間、情景、事物は、端っこにあって、独立した存在として力強い。変わった存在として見られること、「普通」でないとして疑問視されることに対して、「普通」とは何かを反問している。

仮にこれらの写真に写された人々、情景、事物が重苦しく見えたとしたら、それは、社会全体の歪みを反映しているからではないか。

小川さんの写真は、東京を撮影しているが、どこか無国籍な雰囲気をつたえている。また、2006年～2019年を撮影したのに、時代性が感じられない。戦後間もない頃にも見えるし、1970年代、80年代、90年代と言われれば、そうなのかもしれない。だが、これらはごく最近の大都市、東京の片隅である。

どこの場所なのか。どこの国なのか。過去なのか。未来なのか。

これは、どうということなのだろう。社会の最底辺、切り捨てられたものは、いつの時代も、どこの国もあまり変わらないということなのだろうか。ただ言えるのは、そこが田舎や郊外ではなく、大都市だということである。

小川さんは、この社会にはびこる分断を視覚化しているのかもしれない。資本主義に飲み込まれ、底辺に追いやられた風景、窒息しそうになりながら生きている人々を、どこか特別の場所に出かけるわけでもなく、自分の住んでいる街の連なりの中で撮影している。

そうした「普通」でない被写体は、資本主義と商業主義、消費社会に飲み込まれ、主体性を喪失した「普通」が反転したものである。あえて言えば、ここには、そうした「普通」からこぼれ落ちた人間たちの基礎的な価値がある。

社会の末端で、過去に囚われることはないし、未来も考えることもない。今をどう生きるかという、ただそれだけがある強さ。過去も未来でもなく、今をどう生きるかだけを必死に考えざるをえないということは、否が応でも「死」を意識させるだろう。

小川さんの作品の生と死は、文脈化されたもの、物語として消費されるものではなく、みすばらしく、生々しい現実である。

これを絶望と見るか、希望と見るか。

ただ、彼らは、生きる場所を持っている。変なプライドはなく、恥じることもなく、諦めることもなく、基本的な価値を放っている。絶望に近いところで、なお希望を生きている。

これは、死を間近に覗き込みながら、今を生きる生を写した写真集である。

(文/井上昇治)

小川節男プロフィール

- 1952年 埼玉県川口市に生まれる
- 1977年 ニコン EL2、35ミリレンズ付きカメラを購入。写真生活を始める。並行してアルバイト。
- 1982年 伝説のお笑い雑誌『カジノフォーリー』に『都市徘徊』でデビュー。
- 1989年 天安門事件に遭遇。雑誌に報道写真を発表した。帰国後、半年ほどヨーロッパを放浪。
- 2002年 PC自作写真集『NEW YORK』『重慶』を発行
- 2005年 写真集『混沌を往く』を出版。
- 2006年 脳出血で倒れる。半年のリハビリを経て、12月15日街へ出て足を引きずりながら、片手にカメラ、片手に杖をつけて撮影し始める。
- 2019年 吐血して緊急入院。3月27日 ステージ4の胃ガンが発見される。4月19日 開腹手術、他の臓器に転移したのを確認。5月ごろ 脳出血以後に撮りためた作品をまとめた写真集発行を決意。12月 「混沌を往く」の制作編集で全面的に協力を仰いだ竹本幹男氏に最後の写真集出版について相談を持ちかけ、竹本氏プロデュースにより写真集制作が具体化
- 2020年 人生最後の写真集『明日なき我が身』を発行(5月)

2020年7月25日～8月10日

愛知県岡崎市の masayoshi suzuki gallery にて人生最初で最後の展覧会「明日なき我が身」を開催。しかし開催中の7月31日かねてより入院していた埼玉県ホスピス浦和美園にて死去。(享年68歳)



「混沌を往く」2005年発行 (現在は絶版になっています)

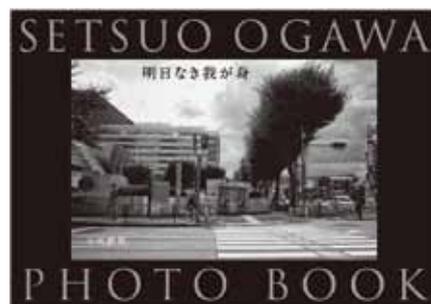
1989年6月4日、民主化を要求する学生・市民に対し、中国当局が弾圧を加え流血騒動となった天安門事件。本書はこの事件に遭遇した小川氏が、その後1988～97年の10年間、中国の〈改革開放〉を撮り続けたストリート・フォト・ドキュメントである。モノトーン+広角レンズで迫った99点は、近代化へと喘ぐ中国(北京・上海・広州・重慶)の生々しい姿を写し出している。燃え上がる軍用トラック、焼き殺された兵士、群集の目で行われる公開裁判…中には思わず顔をそむけてしまうような作品も掲載されている。全世界で5人に1人が中国人となった今、改めて中国を考えさせられる写真集である。



masayoshi suzuki gallery での展覧会風景

Gallery Ju-ichi gatsu 十一月画廊

〒104-0061
東京都中央区銀座7-11-11 長谷川ビル3F
Mail g_juichigatsu@yahoo.co.jp
URL <http://juichigatsu-g.com/>
Tel / Fax 03-3289-8880



【限定300冊】
「明日なき我が身」発売中
本体/¥1800 (税込¥1980)



●東京メトロ銀座線/日比谷線銀座駅A3出口より徒歩5分
●東京メトロ/JR新橋駅銀座口1番出口より徒歩5分